

第4回「泉大津市オリアム随筆賞」

【佳作】

梅酔色の木綿

川辺昭典・東京都

一昨年、春先に亡くなった父の後を追うように母がお盆前に亡くなった。富山の生家での母の通夜に思いがけない顔があらわれた。

隣村の倉田善三氏である。生家とは親戚付き合いをさせてもらっていたが、脳梗塞で倒れ右半身不随と聞いていた。たしかに杖を突き、娘さんに支えられ、ようやく歩いている。

善三氏は焼香を済まされてから、私のそばへ寄るとポケットから小さな包みを出された。

「ちよつと、お願いがあるので、私のそばへ寄るとポケットから小さな包みを出された。包みは濃紫のハンカチ大の木綿の布だった。

「どうしたのですか？」

「出征の時、ご母堂にいただいたものです」

別室で、詳しく話をきくと善三氏は遠くを見つめながら、七十年前のことを懐かしそうに語られた。

戦時中、在郷の村々からも多くの若者が徴兵された。若者たちは村ごとに集まり、我が家の前の道を町の停車場に向かったという。当時、町には加越能鉄道線という私鉄が走っておりそれに乗って石動駅まで行き、北陸本線に乗り換えて金沢にあった第九師団に入営するのである。第九師団は日露戦争の二〇三高地奪還に向かった勇猛な部隊だった。

若者たちは悲壮な決意で、沿道の声援に送られて、郷里の駅に向かったのだった。

「これからどうなるやらとみんな不安だった」

国民の全てが勝利を祈念した時代であったが、富山の片田舎で育った農家の若者は反面、心細さでいっぱいだったという。

当時、連れ合いは出征し、残された家族を守るため母は夜明けから夜更けまで、野菜と米作りで働いていた。それでも、近隣の村から出征があると聞くと、寸暇をさいて母はもう一つの作業をした。ハンカチ大に裁った木綿の白布を、梅と紫蘇を漬け込んできた梅酔に浸しては干すという繰り返しである。時局厳しく生活物資も乏しいおりであったが、母は村長に相談し、村長が伝手を頼って、大阪から上質の泉州木綿を取り寄せたという。

「俺らが通るころには、生垣の花の植え込みに広げられた濃紫の布は百枚もあった」

白布は紫蘇の色から濃紫に近い色にまで染まり、母はそれを一枚、一枚、丁寧に干していた。

部隊が生家の前にやって来ると、それまで兵士を見ていた母が一步前に出て、引率の下士官に重ねた濃紫色の布の束をさし出していったという。

「南方では水や塩が不足するときいています。その時はこの布を口に含んで乾きを防いで下さい。梅と紫蘇の力で唾液も出て来ます。少しでも苦勞の助けになるよう祈っております。ご無事を祈っております」

頭を下げる母に、無言の兵士たちの眼に涙が盛り上がったという。一瞬の沈黙が過ぎ、

やがて兵士たちは玄関前に整列し、母に向って敬礼をした。

「ありがとうございます。必ず武運をたててまいります」

兵士は挙手の礼をとった。空は晴れてどこまでも青く、生垣の花が眩しかった、という。

「近くの在郷からは二百人余りが出征し、南の島へ送られたが、みな、梅酢の布嚙んで、生きて帰ろうと故郷を思った」

善三氏は復員後、真つ先に我が家を訪れ、やがてわが家との親戚付き合いが始まったのだという。

木綿の布を手にしたまま、ふいに胸が詰まってきた。長い年月を経てはいたが、木綿の布はすっかりしており、母のように強かった。

敗戦後、母は時代に呑まれ逆境に陥ちた。つれあいは南方の孤島で戦死し、つれあいの弟、私の父と再婚したが愚痴ひとつ言わず、いつも懸命に働いていた。

東京に出て四十有余年、いつとなく生家を訪れる機会も少なくなつたが、帰れば、生家の庭には数本の梅の木があった。季節には花が咲き、実がとれる。母が健在のときは、干し梅に自生の紫蘇を入れて色美しい梅干しを仕上げるのが習わしだった。手拭いを姉様被りにした母はいつも明るく頑張っていた。

生い茂る梅の木々は手入れもままならず、まるで森のように見える。それでも庭の広くに紫蘇は育っていた。太く硬い軸に紫色の葉が密生している。

翌日、私は花に埋まった母の柩に梅酢染めの木綿を入れ、静かに出棺した。

布を抱いて戦った兵士は無事だったろうか。戦場に母の志は活きただろうか。生きて祖国にもどって来ただろうか。梅酢染めの木綿は私を遙かな遠い日へ誘い続ける。戦争や、その後の艱難のことは決して語らぬ寡黙な母だった。

食材があふれる現代、梅酢染めの木綿に母の面影が重なった。